はじめに

清真学園野球部監督になりあっという間に２１年が経ちました。私の自慢の野球部の大切な教え子達もこれまで２００名を超えました。思い起こしてみますと、野球の技術だけでなく、学業との両立・人間関係などに悩みながら必死に頑張る姿、時には笑い、時には泣きなきながら学生生活に取り組んでいた頃の真剣な顔つきを今でも鮮明に覚えております。

この２１年、一貫して『高校野球をやる上での目標は、甲子園出場。目的は、野球を通して立派な社会人になること』を掲げて活動してまいりました。練習日誌である「熱球ノート」は、現在７０冊目に突入しております。一人ひとりの熱い思いが込められたノートは、時に現役選手にとって大きな道しるべとなり、卒業生にとっては青春の思い出の１ページとして大切に保管されています。私にとっても大切な指導書となっております。

現在、多くのＯＢ・ＯＧがこの野球部から巣立ち社会に出て活躍されております。今回、そのＯＢ・ＯＧの方々に『清真学園野球部を語る』という原稿を依頼したところ早速たくさんの声が届きました。

現役選手への激励はもちろんこれから高校野球をはじめる生徒や応援してくださる多くの方々にぜひお読みいただきたいと思い数回に分けて掲載いたします。本校野球部を知る機会にして頂ければ幸いです。

２０１６年２月

清真学園野球部監督

辻　岡　　敦

日向寺　司　（２４期生）　２００４卒業

一橋大学　～　弁護士

高校野球には「最高の晴れ舞台」があります。

自分が夢中・本気・真剣になったものを競い合い、他人に披露する。

高く青い空、大きな歓声、灼熱のグラウンド、汗と涙…。球場の中だけに留まらず、それを中継するラジオ、聴き入る人たち、翌日の朝刊…。

高校野球の用意する舞台は、その規模においても、唯一校しか勝ち残れないというドラマにおいても、最高のものです。

部活動を通じて得られること（授業を受けているだけでは得られないこと）はたくさんあります。それは大切な仲間であったり、チーム一丸となることの快感であったり、先輩を敬い後輩を見守る姿勢であったり、勝利の歓喜であったり、敗北（しかも自分の大きな失敗で…）の恥辱を引きずりながら顔を上げる精神であったり、親や先生への感謝であったり…。どれもかけがえのないものです。

これらは晴れ舞台での経験によって、より色彩を強められ、心身に刻まれます。（成功だけでなく、失敗も…。）

受験などの不安もありながら、たくさんの OB がそんな「最高の晴れ舞台」を経験し、他では得難いものを学んできました。私自身もそうです。ここでの経験がなければ今の私はありません。

青春には晴れ舞台があったほうがいい。「最高の晴れ舞台」が、あなたを待っています。是非一度、グラウンドを覗いてみてください！

塙 智仁　（２８期生）　２００８年卒業

東京農工大学大学院 在学中

日常生活の中で心から面白いと思えるものに本気で取り組める機会はなかなかありません．特に，チームスポーツをやりたいとなった場合，１チーム分の人数と対戦相手，練習ができる環境が必要になるため，なおさら難しくなります．同世代が皆学生の場合わかりにくいとは思いますが，価値観の近い同世代が同じ時間に学校に集まり，放課後のまとまった時間を同時に使え，さらに好きなことに打ち込める環境があるという状況はかなり貴重です．もしも、野球中継や試合を見て，面白そう，かっこいい，やってみたいと思ったらぜひ実際に自分でやってみることを考えてみてください．実際に終わってしまうまで実感しにくいですが、大多数の人は選手として本気で取り組むことができるのは学生時代が最後になります．かなりの時間を注ぎ込む事になり，キツイことも多いとは思いますが，心底好きなことに熱中できたことは大きな財産になります。

野口 健格　　（２１期生）　２００１年卒業

大学教員（中央学院大学法学部専任講師）

当時の成績：果てしなく“悪い”

私は現在、憲法学者として大学で研究／教育活動に勤しんでいますが、今でも仲間と白球を追っていた“あの日”のことが夢に出てきます。鹿島神宮の森を見上げる伏見のグラウンドは、今でも私の心の中で重要な位置を占めていますが、夢に出てくるのはホームランを打った時のことではなく、失敗して叱られているか、もしくは失敗を誤魔化そうと仲間と悪巧みをしている場面です。私は、清真学園野球部で辻岡先生とともに「仲間」と「失敗」の大切さを学びました。そして、野球部で得た多くの失敗体験とほんの少しの成功体験は、その後の人生に大きな影響を与えています。高校野球は一言でいうと「熱い」。鉄を加工し鍛えるためには、熱く、熱く、熱さなければなりません。人を成長させる際もやはり「熱さ」がなければ駄目なのです。私は今でも“あの日”の「熱さ」のまま日々自分と闘っています。重要なのは勝ち負けではなく、野球部と辻岡敦の「熱さ」じゃないかなぁ

高橋 茂生　　（３５期生）　２０１５年卒業

芝浦工業大学　在学中

私は清真学園硬式野球部で３年間過ごしました。その３年間は私にとって、青春であり、私をプラスの方向へ大きく変えてくれました。今、そう思えるのは、どんなに苦しいとき、辛いときにも共に乗り越えてきた仲間、またどんな時でも一人一人に真摯になって熱く向き合ってくれる先生の存在が大きかったと思います。私は清真学園硬式野球部に入り、一生付き合っていける最高の仲間と出会えました。また、先生には野球の技術だけではなく、「人」として大切なこと、「挨拶」、「返事」、「整理整頓」、「気配り」、「継続することの大切さ」など多くのことを教えていただきました。これらのことは今の自分の土台になっています。

私は清真学園硬式野球部で高校時代を過ごせたことを心から良かったと思っています。そして、みなさんにもそう思ってほしいと思っています。青春時代を仲間と共に野球に本気で打ち込んでみませんか？

是非、みなさん清真学園野球場に足を運んでみてください！！

吉川健太郎（２５期生）　　２００５年卒業

東京農工大学→株式会社コーセー　研究開発職

（テコンドー　全日本大会優勝、日本代表を経験）

「がんばり方を学ぶ場所」

突然ですがあなたは、「がんばり方」を知っていますか？

私は清真野球部で身に着けました。「がんばり方」が分かると、取り組むこと全てが効率よく、成果が出やすくなると思いませんか。だから大学受験という人生の一大イベントを控えた高校生のうちに身に着けておくべきだと感じています。

では「がんばり方」ってどこで教えてくれるでしょうか？体を鍛えること、礼儀や挨拶や人間関係、受験や研究・仕事に必要な知識、これらを得られるサービスはいくつかありますが、「がんばり方」を教えてくれるところは、私の人生では他にありませんでした。何故か。それは「がんばり方」は個人差が大きく、人に教えられるものではなかったからだと思います。仮説検証、試行錯誤、トライ＆エラーの繰り返しで、自分で見つけるしかないのだと思います。

これを日常生活の中で身に着けることは並大抵のことではありません。かなりの負荷に長期間さらされる事が必要なので一人ではきっと逃げたくなってしまいます。

でも野球部には仲間がいます。30 年間以上、毎年の先輩たちがいます。そしてその全員を全力で指導してきた先生方がいます。こんなに素晴らしい環境は経験したことがありません。

清真で野球をするということは文武両道であることも求められ、高校生活のほぼ全てを費やすことになるでしょう。それでもなお、そこで身につけた「がんばり方」は必ずその後の人生を実りある素晴らしいものにしてくれるはずです。だから私は自分のルーツは清真のグラウンドにあると今でも感じています。

毎日が楽しく、目の前の全てが輝いて見える高校生に先を見据えて努力しろということは酷かもしれません。それでも一人でも多くの後輩が清真野球部を通して力をつけ、広く社会で活躍してくれることを願っています。

村上 一仁　　（３２期生）２０１２年卒業

東京理科大学薬学部→東京理科大学大学院修士課程在学中

「夢叶うまで挑戦」これは、清真学園野球部のモットーであり、僕が今でも大切にしている言葉のひとつです。仲間と共に同じ夢を見て、それに向けて努力することがどれだけ楽しくて幸せな時間だったか…今でもとても誇らしく思えます。

もちろん楽しいことばかりではありませんでした。技術が上達しない、試合に出れないなど様々な苦しみがありましたが、それを共有できる仲間たちがいたから自分も頑張ることができ、その仲間は一生かけがえのない存在になりました。

僕は現在、大学の薬学部で日々研究を重ねていますが、将来の「夢」に近づくために、大学院への進学を決断しました。これも「夢叶うまで挑戦」という言葉が背中を押してくれたのかもしれません。

誰にだって「夢」を持つ権利はあります。しかし、熱い監督、最高の仲間たちと仲間と一緒に、人生一度しか来ない青春時代に「夢」を追いかけてみませんか？

額賀秀一朗　（３０期生）　主将　２０１０年卒業

早稲田大学　法学部　在学中

高校野球は人生における最高の教科書です。特に、先生は僕たちを一人前の男にしてくれます。野球部での三年間は、毎日朝早く起きて、夕方遅くまで練習して、勉強もやって、という毎日。ほとんど遊んだ思い出はなく、正直、高校での思い出は野球しかありませんが、礼儀も道徳も何から何まで高校野球で学ぶことができました。

そして僕は人一倍不器用な人間でした。足も遅く、試合で仲間に迷惑をかけた経験は思い出してもキリがありません。しかし、野球というチームプレーで成り立つスポーツにおいては１人ひとりの役割が活きてきます。他に自分ができることは何か？それを意識して欠点を埋め合わせる練習を毎日してきました。引退した今でも時々うまくいかない時があります。そんな時は自分に常に言い聞かせます。「大丈夫だ、俺ならやれる。すぐには結果が出なくとも、あのつらい練習を乗り越えたのだから。」いつでも大事なのはガッツと前向きな態度です。僕が経験してきた成功の決め手は闘争心でした。成功に自信があるということは本当に素晴らしいことです。絶対に逃げません。絶対に迷いません。状況に関係なく、スコアボードに関係なく、勝利を確信していました。いつも頑張ってきたからです。努力は裏切りません。もし結果が伴わなかったとしても、次があります。そして仲間があなたを支えてくれます。勝負にも未練を残しません。ポジティブになれば何でもできます。清真学園の野球部だからこそ、僕らを自立した一人前の男にしてくれるのです。

額賀 慶二朗（３２期生）　２０１２年卒業

明治大学　在学中

明治大学に在籍している額賀と申します。現在、私は就職活動の真っただ中にありますので、そのことと絡めながら高校野球の魅力について書こうと思います。

就職活動において、部活動に所属していた学生は非常に高く評価されます。なぜなら、学生生活のほとんどの時間を厳しい部活動に費やしてきたからです。部活動で身に着けた「責任感」や「忍耐力」は必ず仕事に活かされ、優れた結果を生み出します。企業もその点を評価しています。

実際に私も、辛いことがあると高校野球を思い出すようにしています。高校野球に比べると、今やっていることなんて大したことないじゃないか。そう思うと気持ちが楽になるからです。現在就職活動の最中ですが、すでに何度も高校野球に助けられています。そしてこれからの人生においても、高校野球の経験は私を助けてくれると確信しています。

私は、皆様が清真学園野球部に入り「人生の支えとなるような経験」を得ることを願っています。「高校野球をしてきて良かった」と感じる瞬間が必ず来るので、臆することなく野球部の門を叩いてみてください。

松岡　萌　（３３期生）　２０１３年卒業

成城大学　　在学中

私は三年間、マネージャーとして野球部に所属していました。マネージャーと聞くと、雑用ばかりするのではないかと想像するかもしれません。しかし清真学園野球部では、マネージャーも選手と一緒に一つの目標に向かって成長することができます。

この野球部で人を支えることに全力を注ぎ、仲間と切磋琢磨した時間は、私の人生の大きな宝物となり、私を大きく変えてくれました。監督と選手たちからは、諦めない心の大切さや何かに全力を注ぐことの素晴らしさを教わりました。野球部で得たものは、今でも私の中で輝き続けています。

野球が好きではなくても、選手のプレーを見たら絶対に野球が好きになるので心配ありません。（私は野球部に入った時、ルールすら完璧には知りませんでした。）少しでも興味があったら是非挑戦してみてください。きっと大きなものを得ることができると思います。頑張ってください。

木村 圭佑 （２８期生） ２００８年卒業

成城大学～エレマテック株式会社

「プロ野球は見ないけれど、高校野球は毎年欠かさず見る」という人がいる程に、数在る部活動の中で、高校野球は長い間、世間から最も注目を浴び続けています。

その理由は、観客の心を動かす球児の一生懸命なプレーは勿論、球児の表情や発言から見える、人間力が一つの要因であると思います。

規律や礼儀を重んじる高校野球を通じて得る人間力は、大学受験、就職活動、社会人生活等、これからの人生に必ず活かされる筈です。

私自身、当時を振り返ると、しっかりとした挨拶も出来ない様な人間でしたが、清真学園野球部に入部し、挨拶、礼儀、努力の大切さ等、とても多くの事を学びました。その経験は、現在社会人生活を送る、私の礎と成っております。

皆様が、信頼の出来る先生方がいる清真学園野球部で、最高の仲間と一生の思い出に残る、熱い学生生活を送られる事を願っております。

関戸　慎一郎（２４期生） ２００４年卒業

法政大学～日鉄住金テクノロジー㈱

後輩となる皆様へ

私が 6 年間、清真学園野球部に籍を置き、結果として得たものが 2 つある。

卒業して 10 年以上経つが、その時に得たものの大きさを、今になって「本当に良かった」と気づく次第である。以下にその 2 点ご紹介したい。

1 つ目は、「一生付き合える仲間」ができた事。それこそ 6 年間同じ目標を目指し、志を共有し、苦楽を共に過ごした仲間である。青臭いが、野球部を通じなければ自分にはそんな仲間が出来なかった事であろう。そして、そんな仲間を作るのに私が重要だと思うのは、楽しい事よりも辛い事を一緒に共有する事だと思う。経験上、誰かと辛い状況を一緒になって立ち向かうことは、人生において機会は少ないものだ。そういう経験を野球部で経験することが出来たのは財産である。

2 つ目は、「社会人としての基礎」が出来上がった事。礼儀・作法、それから目配り・気配り・心配り。社会人の基礎を監督より教えを受け、学生のうちに自然と身についた事は非常にありがたかった。社会に出ると、意外に出来ていない人が多いものだ。

これを培うために野球部に入るという動機の人は少ないとは思うが、野球部に入った結果こんなメリットが+α で付いてくるのも悪くは無いのでは？

非常に簡単ではあるが、以上が私の財産である。他にももちろん沢山あるが。

これを読んで、野球部入部を人生の選択肢に入れて頂けたら非常に幸いである。

大塚　一憲（２８期生）　　２００８年卒業

青山学院大学→横浜市立大学大学院→製薬　臨床開発職

在学生の皆さんは学校で何がやりたいですか？
私は清真学園のＯＢとして，在学生の皆さんには３つのことを知って頂きたいです。

1.　清真学園は茨城県内でレベルの高い進学校。

在学生の方は「そんなことない(笑)」と思うかもしれませんが，ちょっと考えてみてください。茨城県内で偏差値上位の高校は特進，特別クラスなどを設けている場合が多いです。さらに，そのクラスは部活に入れないなどの制約も多いと聞きます。
一方，清真学園は部活も恋愛も勉強も自由にできます。部活も活発で，ラグビー部は全国を目指す強豪ですし，野球部も県東地区大会で優勝する実力です。尚且つ，毎年，国公立や有名私立に入学者のいるレベルの高い学校なのです。

2.　学生時代に勉強だけやるなんてもったいない！

私は清真学園を卒業して 8 年経ちますが，この時の経験は大学でも社会人でも活きています。せっかく何でもできる自由な高校に入ったのです。勉強だけやるなんてもったいない。勉強も恋愛も部活もいろんな経験をして高校卒業後の役に立てて欲しいです。

3.　清真学園野球部の良さ

最後に野球部ＯＢとして，清真学園野球部について語りたいと思います。
もし，今までの話を見て，何か部活に入りたいと思ってくれた人は野球部をオススメします。

野球部の一番の魅力は熱い監督です。私は先生が指揮する野球部で人間性，野球の楽しさ，一生付き合っていく友達を得ることができました。

野球部のレベルも決して低いものではありません。過去には県東地区大会で優勝したこともありますし，国際試合の選抜に選ばれた選手もいました。もちろん野球未経験で試合に出ることは可能です。

学生の時に勉強，部活，恋愛全部経験して学生生活を楽しんでください。

野口幸嗣（２８期生）　　２００８卒業

早稲田大学～アクセンチュア株式会社

私のこれまでの人生の礎となったもの、それは辻岡監督の“ノック”です。私は技術的にも体力的にも精神的にもひ弱でしたが、三年間必死にノックを受け続けることで、苦しみや困難なことに立ち向かい、苦しい時こそ自ら燃え上がる強さを身に付けることが出来ました。この経験は、社会に出た今なお私を支えてくれる、かけがえのない宝物です。

これから高校野球をやりたい方、進路に悩んでいる方、ぜひ清真学園野球部の門を叩いてみて下さい。清真学園野球部では、他の OB・OG の方が述べているとおり、本当に素晴らしい経験が出来、一生涯の仲間と恩師に出会えると思います。

念願の甲子園出場を果たし、最高の高校生活が送れることを心から願っております。

藤田優真（３６期生）　　２０１６年卒業

山形大学在学中

今自身の高校生活を振り返ってみると、思い出されることのほとんどが野球部での思い出です。僕にとって清真学園野球部として過ごした時間は、それほどかけがえのないものとなっています。

２０１３年の春、そこから僕の高校野球が始まりました。僕は清真学園に高校から入学しました。最初のうちは、チームメイトとの会話もどこかぎこちなく、練習も大変で、一日一日を過ごすのに必死でした。それでも、練習や試合を繰り返すうちに徐々に慣れていき、チームの仲間とも絆が深まっていき、気づいたらどこに行くにも何をするにしても野球部の仲間と常に一緒にいました。つらい練習も、試合に勝つ喜びも、負けた時の悔しさも、様々なことを仲間と共に分かち合いました。時には互いに衝突することもありました。それでも

たくさんのことを共に乗り越えてきた仲間として、これからもずっと付き合っていくと思います。そんな風に思える一生の友と、僕はこの清真学園野球部を通して出会うことができました。

僕は清真学園野球部であったことを誇りに思います。練習も厳しかったし、悔しい思いもたくさんしました。しかし、今の僕があるのはあの強烈な三年間があったからだと思います。これからどんなに大きい壁にぶつかったとしても、あの三年間を過ごしたことを思えば絶対に乗り越えていける自身があります。清真学園野球部は、僕を一人の人間としてものすごく成長させてくれたすばらしい場所でした。

古田原　徹（３６期生）　　２０１６年卒業

横浜国立大学　在学中

清真学園硬式野球部という場所は、現在の私にとってかけがえのない場所です。

野球部での３年間は決して楽しかったことばかりとは言えず、正直言って辛いことばかりでした。３年間でレギュラーにはなれなったし、試合に出るチャンスをもらっても、ミスをして怒られてばかりでした。しかし、そんな辛いことばかりでもめげずに続けてこられたのは、先輩や後輩、先生方、そして１１人の大切な同級生がいたからです。部員全員が一丸となって、ワンプレーに必死で応援する。いい結果なら一緒に喜び、悪かったら、こうした方がいいとアドバイスをくれる。このチームの結束力はどのチームにも負けない清真学園硬式野球部の一つの魅力だと思います。

やはり野球をやったことで、大切な仲間達と出会うことができたし、そんな仲間達の応援や野球部で培った精神力や根性があったからこそ、自分は第一志望の大学に合格することができました。

人ごとなのに自分のことのように一喜一憂してくれる仲間達とともに過ごすことができ、心身ともに一回りも二回りも大きくなれる貴重な３年間を過ごせるのは野球部だけです！一人でも多くの方が自分たちの後輩になってくれることを願っています。

玉川　大和（３２期生）　　２０１２年卒業

筑波大学　医学群　医学類　在学中

「自信」とは自分を信じると書きます。つまり、自信というものは人からつけてもらうものではなく自分で自分を信じられるようになって初めて手に入れることができるものだと僕は思っています。僕の場合は高校時代の 3 年間の練習をやりきったことが今の自分の大きな自信になっています。この経験は卒後の二年間の浪人時代にもいきました。勉強漬けの毎日で辛い時期もありましたが高校時代の辛い練習を乗り切ったのだからと踏ん張ることができました。また、高校野球で学んだ自分自身にベクトルを向け自分の弱い部分にもしっかりと向き合うことの大切さ。勉強に関して言えば、ただやみくもに勉強するのではなくしっかりと自分を分析して、苦手な所を一つ一つ潰していくこと。そのことによって試験当日は「自分はこれだけやってきたから大丈夫だ」という確かな自信を持って挑むことができました。その結果、運よく合格できたと思っています。このように自信を持って物事に挑むことができるかどうかで結果は大きく左右されるということを、数多くの失敗と成功から体感することができました。そのきっかけを作ってくれたのは紛れもなく高校野球での 3 年間です。高校野球からはここには書ききれないくらいほどの多くの事を教えてもらいました。まとまりない文章になってしまいましたが最後まで読んでいただきありがとうございました。